

【連載「試聴室探訪記」第29回】

～谷口ともり、魅惑のパノラマ写真の世界～

名盤の故郷 江崎邸訪問

フォトグラファー 谷口 ともり・編集委員 森 芳久



今回はオクタヴィア・レコードを率いる江崎友淑氏の試聴室を訪問いたしました。ご存じの方も多いと思いますが、かつて氏はチェコ・フィルハーモニー管弦楽団のトランペット奏者として活躍された後、レコーディング・エンジニアに転身され、1999年6月に株式会社オクタヴィア・レコードを創立、代表取締役を務められています。また、江崎氏はレコード制作者としてプロ録音機材はもちろんですが、再生機器についても超マニアといっても過言ではありません。今回ご紹介する部屋と装置をご覧いただければ皆様も納得されることでしょう。

それは江崎氏の父君が大のオーディオマニアだったことが大きく影響しているとのこと。当然のことながら江崎氏は小学生の低学年の頃から最高のオーディオ製品を聴いて育ったため、レコードや再生音については幼いころからその耳が鍛えあげられ、またその組み合わせや設置方法についてもノウハウが積み上げられたのです。特に電源やアースラインの重要性についても徹底した考えを持たれています。事実、江崎邸ではこの屋敷内に仕事用スタジオも併設されているため、自分の屋敷だけのための柱上トランスを2個設置しその一つをスタジオ用、そしてもう一方をこの部屋のオーディオ装置用としているのです。つまり、まったく他のノイズが混入しないオーディオ専用電源が用意されているという理想的な環境です。もちろん、アースについても庭に60本ものアース棒を埋め込み完璧に近い条件を整えています。一般家庭用電源にレギュレーターなどを入れ、電源を安定化し、またノイズ除去をするのも有効な方法ですが、江崎氏は「エ

コーや倍音はきれいになるが、音の骨格が小さくなる傾向があるように思える」と感じ、この贅沢な専用電源を設置されたのです。その結果「音に厚みと静寂感が増した」とのことです。

これだけの贅沢な環境にしたのは「音は数字やデータだけでは表せません。いくらデータ上で良い録音しても、再生をしてみるとそこには音の違いが顕著に表れます。だから再生装置とその再生環境はできるかぎり良いものを用意する必要があると思っています」との氏の強い思いからなのです。

現在メインに使用されているオーディオのラインナップを図-1にご紹介いたしました。

確かに、ここでの音はとても端正で輪郭がはっきりとし、まるで眼前にオーケストラが浮かびあがるかのような印象を受けました。そしてまた、そこにはスタジオモニターの研ぎ澄まされたサウンドとは異なった、温かい音が再現されていました。

それでは、今回も谷口ともりさんの素晴らしいパノラマ写真で江崎さんのリスニング・ルームをご覧ください。オーディオ装置はもちろん、各所に面白い発見があると思いますので、ズーム機構をいかして十分にお楽しみください。

尚、バック音楽は江崎氏が録音されたショパンのピアノ協奏曲第2番へ長調の第2楽章ラルゲットです。残念ながらここではオリジナル音源ではなくMP3に圧縮していますが、この曲の繊細で研ぎ澄まされた演奏をお聴きになりながら部屋の装置とその雰囲気眺めていただければ、この部屋の主のオーディオにかかる思いと情熱がより強く伝わることでしょう。

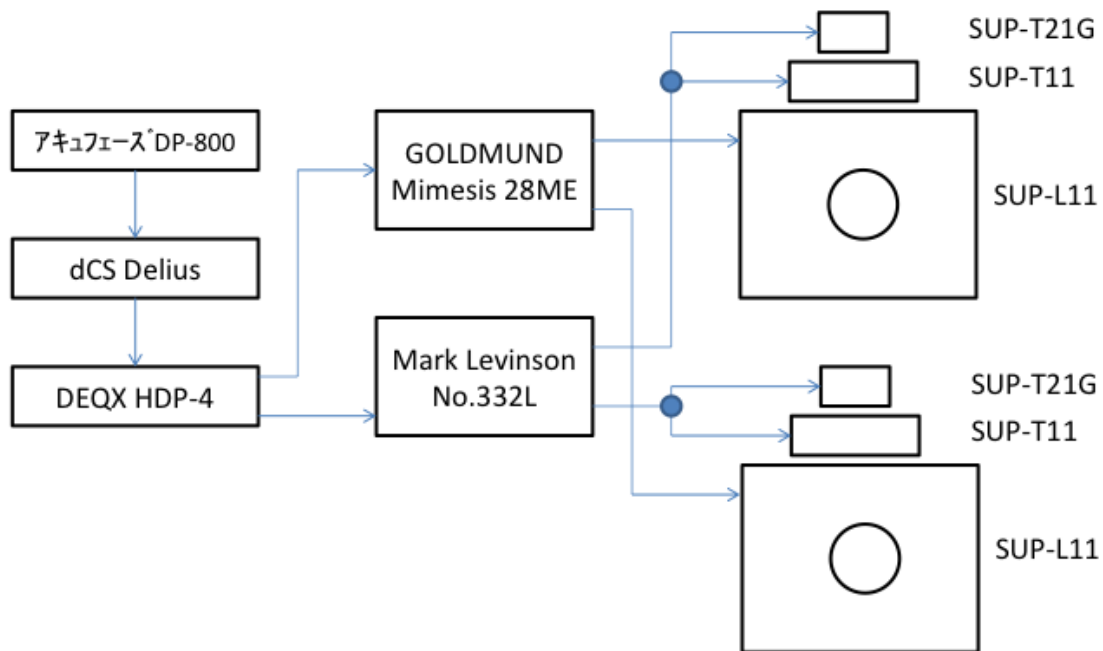


図-1. 江崎邸のメイン試聴システム

パノラマ画像の操作説明

- パノラマ写真は、[ここ](#)か、はじめのページの**画像**をクリックしてご覧ください。
(ローディングに若干時間がかかる場合があります。)
- マウス操作で、画面を上下・左右 360 度、自在に回転してご覧いただけます。
- 画面下にある操作ボタンで次の操作ができます。
 - + 画面のズームイン
 - 画面のズームアウト
 - ← 画面の左移動
 - 画面の右移動
 - ↑ 画面の上方向への移動
 - ↓ 画面の下方向への移動